

## 第5章 総括

### 第1節 戸来館遺跡の主な調査成果

戸来館遺跡は、十和田湖の東、新郷村中心部の金ヶ沢地区に所在し、村役場南西側に隣接する高台（標高145m前後）に位置する。一帯は緑豊かで静かな山間の地であり、館跡や戸来家にまつわる地名・家伝・逸話も知られるなど、これからの歴史的発見が期待される土地柄でもある。

本遺跡の調査・報告は、平成30年度に実施した試掘調査（青森県教育委員会2019）に基づき、今回初めて実施された。村内では咽畑遺跡と獅子神遺跡に次ぐ3例目の本格的調査である。

調査区は、五戸川に向かって突出する台地の東側縁辺部に該当し、これをめぐって東西へ走る国道454号線に沿う形で設定された。安全対策上、急斜面・宅地前・電柱周辺などは未調査、攪乱・削平も多く、調査結果や解釈に何らかの影響を及ぼしている部分もあると思われる。

遺跡内の地形は、舌状台地の自然地形を基本としつつも、中世城館期から現代に至るまでの人工地形が入り交じる状況と推測される。調査区内は急斜面主体であり、台地上のわずかな平坦面には五戸川や役場を見下ろすように古民家などが軒を連ね、隣接地は宅地や畑地などに利用されている。

主な成果として、縄文時代早期中葉、同中期後葉、平安時代中期、中世以降の長期に亘る歴史的足跡が断続的に得られた（下記）。民地や急斜面などの制約が多いこともあり、いずれの時期も断片的内容となるが、今後、平坦部の調査が進むにつれ、様々な解明に近づいていくと予想される。

縄文時代：今のところ新郷村最古の歴史資料となる白浜式土器片1点のほか、中期後葉の集落跡の一部らしき土坑2基と土器・石器。

平安時代：十和田a火山灰（915年）降下以後の10世紀中葉以降に形成された集落跡の一部とみられる竪穴建物跡3棟（カマド南側・北東側各1、不明1）と土器・鉄製品。

中世：館跡南東側縁辺部の最上位～中位を調査。標高135～147m前後、五戸川との比高差20～30m程度。発見された主な遺構・遺物は、曲輪3ヶ所以上、帯曲輪（腰曲輪）4～5ヶ所、堀跡2条、溝跡3条、竪穴遺構1～2棟、銭貨3点など。柱穴群の帰属時期は不明、施設復元も現状困難である。これらの遺構は『青森県の中世城館』にみえない2本の堀に区画された3つの曲輪と帯曲輪を中心とする館跡南東側の諸施設と考えられる。すなわち、堀跡1により分断された曲輪1と曲輪2、堀跡2により分断された曲輪2と曲輪3、そして曲輪1の下方に帯曲輪1、曲輪2の下方に帯曲輪2・3・4（3と4は同一か）、曲輪3の斜面下方に位置する帯曲輪5が主要施設となる。また、国道454号線一帯にも一定規模の曲輪が存在する模様である。この他、曲輪1の縁辺部に竪穴遺構、帯曲輪1・4・5の基部に排水溝（溝跡）が存在する。館跡の外観は、曲輪・帯曲輪・堀跡の形態・標高が各々類似することから、形状や高さが揃えられ、整えられた普請だった様子が窺える。出土遺物は非常に少ないが、無文銭の存在を重視すれば、16世紀後半代に機能していた城館と仮定される。

その他：近世～現代の柱穴群・陶磁器・銭貨など。地質調査では、遺跡・館跡にまつわる台地の形成が約15,000年前の十和田・八戸火砕流を起源とする土石流堆積物の膨大かつ地形を大きく変える堆積の後、二ノ倉スコリア（約11,600年前）、新郷軽石（約11,000年前）、南部軽石（約9,200年前）、中振軽石（約6,200年前）と続くことが判明した。（調査担当者一同）

## 第2節 戸来館の歴史的評価

本節は、中世城館部分の発掘調査成果を地域史に位置づけることを目的とする。その手順として、新郷周辺の中世史と戸来氏の来歴および中世考古学の成果を概観した後、戸来館の評価へと移る。

### 1. 戸来館遺跡周辺の中世略史

本地域の歴史史料は、同時代史料から伝承までが混在している（第2章）。これらを極力区別しながら要点を述べると、当地方の起源は、平安時代末期における奥州藤原氏の統治下「糠部」（『吾妻鏡』）、ないし中世前期の寛元4年（1246）における得宗領「糠部五戸」（『北条時頼下文』常陸宇都宮文書）として鎌倉幕府の統治下におかれていた段階まで遡り得る。

戸来の初出は、永仁5年（1297）に五戸川流域の諸村とともに記された「へらいのかう」（『五戸郷検注進状』）であり、同じく新郷村西越地区の初出は、正安3年（1301）の「三戸さけこし」（『きぬ女申詞書案』）と目されている。ともに、鎌倉幕府の安定的統治の下、発展が進んでいたであろう。先の寛元年間以降、五戸の地は代々三浦氏が治めていた模様だが、建武2年（1335）、三浦介平時継・高継父子の分裂を経た後、「陸奥糠部内五戸」は「父介入道々海跡本領事」（『足利尊氏宛行状』）として足利尊氏から子高継へと宛がわれている。

永正年間（1504～1521）、戸来の地は、糠部「五の部」の馬産地「やうい」として現れ、その馬印（焼印）は「雀」とされている（『糠部九箇部馬焼印図』古今要覧稿）。先の『きぬ女申詞書案』には、新郷一帯が馬産地だった片鱗はみえているが、南部氏の支配により更なる発展を遂げていたであろう。

文化・信仰面について、戸来田中には、青森県南地方の修験で大きな役割を担った多聞院が在住、現存する多数の文書は大永5年（1525）を最古とし、16世紀以降充実する。寺社の創建年代が江戸時代以前と伝わるのは、五戸川流域では新郷村戸来の三嶽神社（貞観5年（863））と曹洞宗長泉寺（明応5年（1496））、五戸町倉石又重の曹洞宗儒童寺（天正4年（1576））、同中市の曹洞宗源福寺（元亀3年（1572））、同上新井田の浄土宗専念寺（元亀元年（1570））、同銀杏木の曹洞宗高雲寺と八幡宮（ともに永正4年（1507））、同じく浅水川流域では五戸町浅水の曹洞宗宝福寺（大永3年（1523））と真言宗来福院（大永7年（1527））、五戸郷検注進状の「きたならさき」に比定される八戸市豊崎町の真言宗普賢院（承安元年（1171））や七崎神社（承和元年（834））が知られる。一般的に曹洞宗寺院が多く、戸来の寺社は当地域の中でも古社・古刹が目立つ傾向にあるといえよう。

その他の伝承については、明応5年、戸来館遺跡北東に隣接する長泉寺が同じ戸来の獅子神地区から現在の金ヶ沢地区へ移転してきたという。戸来氏の統治も文明年間（1469～1486）に始まり、慶長3年（1598）には戸来館主として800石を知行し、三戸南部氏譜代の臣として活躍したという。天正19年（1591）に起きた九戸の乱における五戸領主層の動向は、勝者となった南部信直方に木村一党の戸来氏（戸来館）・又重氏（又重城）・木村氏（五戸館）、敗者となった九戸政実方に中市氏（中市館）と石沢氏（石沢館）とに分かれたと伝わる。戸来館の東にある又重城には、政実自身の攻撃を撃退した逸話も残るほか、中市城は破却されたという（「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事」）。

### 2. 戸来氏の来歴

江戸時代に編纂された家譜によると、戸来氏の本姓は秀郷流藤原氏、下野国小山氏の支流木村氏の嫡家とされる。戸来初代となる小山秀政が南部光行に従って糠部三戸に入り、同三代目祐秀の代に南

部実光から五戸木村郷を与えられた後、代々五戸を拠点としたが、戦国時代の文明年間に3家に分かれ、嫡流が戸来に定着、戸来氏を名乗ったとされる。この時、次男は五戸（木村家）、三男は又重（又重家）に配されたという。なお、『奥南旧指録』では、平安初期の貴族、紀名虎の子孫とされている。

今、これら家譜前半を裏付ける歴史的証拠は必ずしも定かではないが、戸来氏の足跡は戦国時代末期から江戸時代初期に活躍した保秀（治部）・秀純（美濃）の頃より明らかとなり始め、やがて戸来氏と木村一党は三戸南部氏そして盛岡藩重臣として南部一門に次ぐ待遇を受けるようになる。いずれも江戸時代の記録になるが、保秀・秀純父子は、小田原参陣（天正18年（1589））、九戸城攻撃（天正19年（1591））、最上表従軍（慶長5年（1600））、岩崎合戦（同年）、大阪冬の陣（慶長19年（1614））等に加わったとされ、その武功を讃えた逸話も幾つか知られる。慶長3年（1598）の状況を示すとされる『南部氏慶長支配帳』（館持支配帳）には、「五戸戸来館八百石三ツ巴戸来治部」と記されている。

次の江戸時代、五戸川流域は引き続き木村一党による支配が認められた。特に、木村氏が代々五戸代官務めたことは知られている。しかし、又重氏が先ず凋落。戸来家も秀純の嫡子国秀の死（寛文11年（1671））を以って3家に分裂、各々平士へ格下げとなるが、その後も戸来3家による戸来村の分割統治は認められた。この頃、戸来金ヶ沢より上手の五戸川最上流域は、中世前期以降、開発が大きく進んでいた模様であり、現集落の基礎が固まりつつあった（延宝7年（1679）「百姓小高帳」）。戸来家不振の時期は暫く続いたが、幕末に十郎左衛門家の秀包（官左衛門）が家老に抜擢、約150年振りに重臣へ返り咲く。なお、現在戸来に居住する戸来氏は、六右衛門家秀持の末裔といわれている。

### 3. 戸来館周辺における中世の考古学的様相

五戸川および浅水川流域には、上記の歴史的状況を裏付けるかのように、中世とされる遺跡が点在する（第2章）。その種類・内訳は、城館跡を主体とし、埋蔵銭出土地（戸来女ヶ崎）や社寺跡（戸来長泉寺跡）に及ぶ。しかし、具体的状況がある程度判明しているのは、五戸町によって整備が進められた中市館と五戸館に過ぎない。ともに15～16世紀代の所産とされ、遺構は掘立柱建物跡や竪穴建物跡、遺物は各種陶磁器・茶臼・鉄製品・古銭・鍛冶道具などが断片的に発見されている。その他の城館は未調査につき、中世か否かの判別も含め、曖昧な部分が多い。これからの解明が期待される。

なお、女ヶ崎出土埋蔵銭は、16世紀後半とされている。青森県南地方では数少ない埋蔵銭出土地であるとともに、先の五戸川最上流域の開発とも関連付けることが可能な貴重な存在である。また、長泉寺跡（新郷村史跡）には、丘陵斜面を削平・平坦化したと思われる場所に礎石らしき扁平な石が点在する。今は近世の社寺跡として遺跡登録されているが、寺伝に信を置くと明応4年以前に遡る可能性があり、こちらも注目すべき存在である。

### 4. 戸来館の認識および研究史

これより先は戸来館そのものに対する記載が中心となるが、その前に、戸来館の具体的位置や構造を示す中・近世の絵図や文書等の記録類が今日まで未発見であることを先ず確認しておきたい。

ところで、戸来館の「跡」について触れた文献は、2つ知られる。一つは沼館愛三氏の『南部諸城の研究』、もう一つは、昭和58年（1983）に当教育委員会が刊行した『青森県の中世城館』である。

先ず沼館氏は、戸来館を五戸川河谷の平城<sub>※1</sub>と捉え、位置・立地・城主・戦略的価値・由来、そして戸来氏の来歴を記した（下記）。位置は、五戸の西南12kmとしている。これは五戸館跡（現歴史みらいパーク）から戸来館遺跡の距離約13kmとほぼ一致するため、沼館氏は本遺跡を戸来館跡と見做していたと思われる。



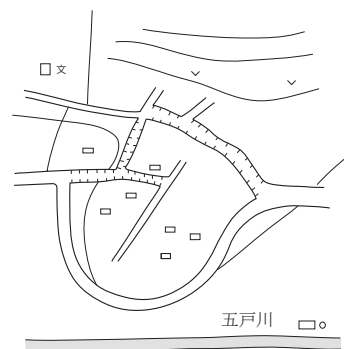
**戸来館** 五戸の西南十二軒三戸郡戸来村にあり五戸川の上流右岸に位置する。当館の由来は明らかでないが戸来氏の居館である。戸来氏は又重の木村氏と同族で、奥南旧指録には五戸の又重、戸来の二家は木村氏にて紀名虎の子孫であると記している。館持支配帳には、「五戸戸来館八百石戸来治部」とある。其後戸来氏の動静は明かではないが南部八戸藩士戸来氏があり、其後裔と称している。戸来館は丘陵の末端が台地となり五戸河谷に臨んだ丘を利用した平城である。三戸城西北辺防備の要点ではあるが、又重よりも西偏しているのも又重に比し価値が著しく減少する。

(『南部諸城の研究』p.87-88)

次に『青森県の中世城館』では、位置・地名・略図が明示され、所在地は戸来館遺跡一帯とされた。しかし、沼館氏とは異なり、館主・沿革は不明としている(下記)。

**戸来館** 新郷村 新郷村の旧役場跡付近を通称館とよび(館神集落)、空堀が残存する。五戸川の北岸台地上に位置し、館跡の南を県道が通っているが、この県道は一部堀跡を通過している。堀合坂と呼ぶところもある。このあたりには馬場の地名があり、この館に関連する場所の一部と思われる。館主・沿革等不明。

(『青森県の中世城館』p.191)



両見解は、館主の言及に違いがあるものの、戸来館遺跡一帯を中世戸来館と捉えている点は一致していよう。詳しい経緯は不明だが、昭和のある時期に行われた本遺跡の登録も、両見解に基づいて行われたとみなされる。しかし、中・近世における戸来館の認識が不充分である今、本遺跡と中世戸来館が同一と言い切れるか若干疑問が残る。なぜなら、戸来地区には沢口館、長峰館、倉沢出口館も存在するからである※2。戸来館遺跡は、あくまで推戸来館というべき存在といえる。

とはいえ、本遺跡一帯が中世戸来館だった可能性は高い。矛盾するようだが、念のためこの点に触れておくと、今日、本遺跡を城館とみなす地元の認識は相当薄くなってきているが、本遺跡一帯にまつわる江戸から明治時代前期の史料には、館・館神・馬場などの地名が継続的に表れており、堀合坂に代表されるように、本地区を城館と見做す地元の承認は今日まで続いている。これに対し、先に掲げた戸来地区の他の城館および集落では、同様の承認を見出し難い。要は、戸来地区で城館という認識が明確かつ代々続いている場所は、戸来館遺跡を含む館神地区周辺のみといえる。

更に戸来館遺跡周辺には、上述のとおり、五戸川流域でも古くから存在する信仰施設などが集中する特徴がある。このうち、戸来家が中興し、その菩提所ともなった長泉寺には、今なお殿様の墓(寛文11年(1671))が現存し、何名かの当主が埋葬されたと伝わる。また、館神地区には、今も戸来家とその家臣の流れを汲む家が在住し、幕末の盛岡藩家老戸来秀包の来訪と在地家臣との交流の話、殿様である戸来家の位牌を祀る家まで存在するなど、戸来家と特に密接に関係する地となっている。

このように、本遺跡周辺における古地名の在り方、中世を起源とする信仰施設の配置状況、戸来家にまつわる菩提寺や伝説の在り方などを総合すると、江戸時代頃より館跡や文化信仰の中心地として歴史的に認められてきたのは戸来館遺跡一帯を除いて他に無く、よって中世後半にまで遡り得る戸来の中心地だったと目される訳である。そして、その核となったであろう戸来館の跡こそ、今回の調査で発見された城館跡である可能性が最も高いと考えられるのである。

## 5. 戸来館跡にまつわる聞き取り

それでは今、戸来館遺跡を城館跡とみなす認識はいかほどであろうか。遺跡周辺の居住者や出身者に簡単な聞き取りを行ったので、参考までに示す。対象人数は5～10名程度、対象年齢は60～80代。結論からすると、全般的に城館という認識が低い反面、堀合坂が城の堀という話は聞いたことがある



という矛盾するような回答が大半だった。その中でも、遺跡内に居住する80代半ばの男性2名から館跡にまつわる明瞭かつ具体的な証言が得られた。本稿は、概ね両者の話をまとめたものとなる。

さて、下記①～③は発掘調査区内に係る事項であるが、城館の施設という意識は聞かれなかった。一方、④～⑥は発掘調査区外に係る事項であり、堀および帯曲輪（腰曲輪）、馬場などが城館の一部として認識されている様子も窺われた。ちなみに、両者以下の年齢になると、代々居住している高齢者ですら知らない傾向にある。この点も鑑み、調査中、戸来小学校の生徒などを対象に現地説明会を実施、戸来館遺跡および戸来館、村内主要遺跡について理解を深めてもらう機会を設けた（写真左）。

- ① 堀跡1 地域の通路だった時期があり、戸来小学校などへ通じる脇道であった。30～40年ほど前から使われなくなった。堀底に下水管（塩化ビニール製）を埋設したり、ぬかるみ防止のため砂礫を敷き詰めたりした（筆者注：下水管・砂礫とも調査中に確認）。
- ② 堀跡2 国道と個人宅とを上り下りする通路として調査直前まで使っていた。
- ③ 帯曲輪1 部分的に改変され、堀合坂東側入口と堀1を結ぶ通路の一部だった時期がある。
- ④ 堀合坂 城の堀と聞いている（写真右、旧地籍図）。
- ⑤ 戸来館遺跡西側一帯 堀跡（筆者注：帯曲輪か）と聞いている（同絵図⑥・⑩）。
- ⑥ 馬場地区 城の一部だったと聞かされたような記憶があるが定かではない。場所は館神地区の南西、国道454号線一帯だろう（筆者注：明治時代初期は支村）。



戸来小学校児童ほか現地説明会



堀合坂・龍神社・金ヶ沢（東から）

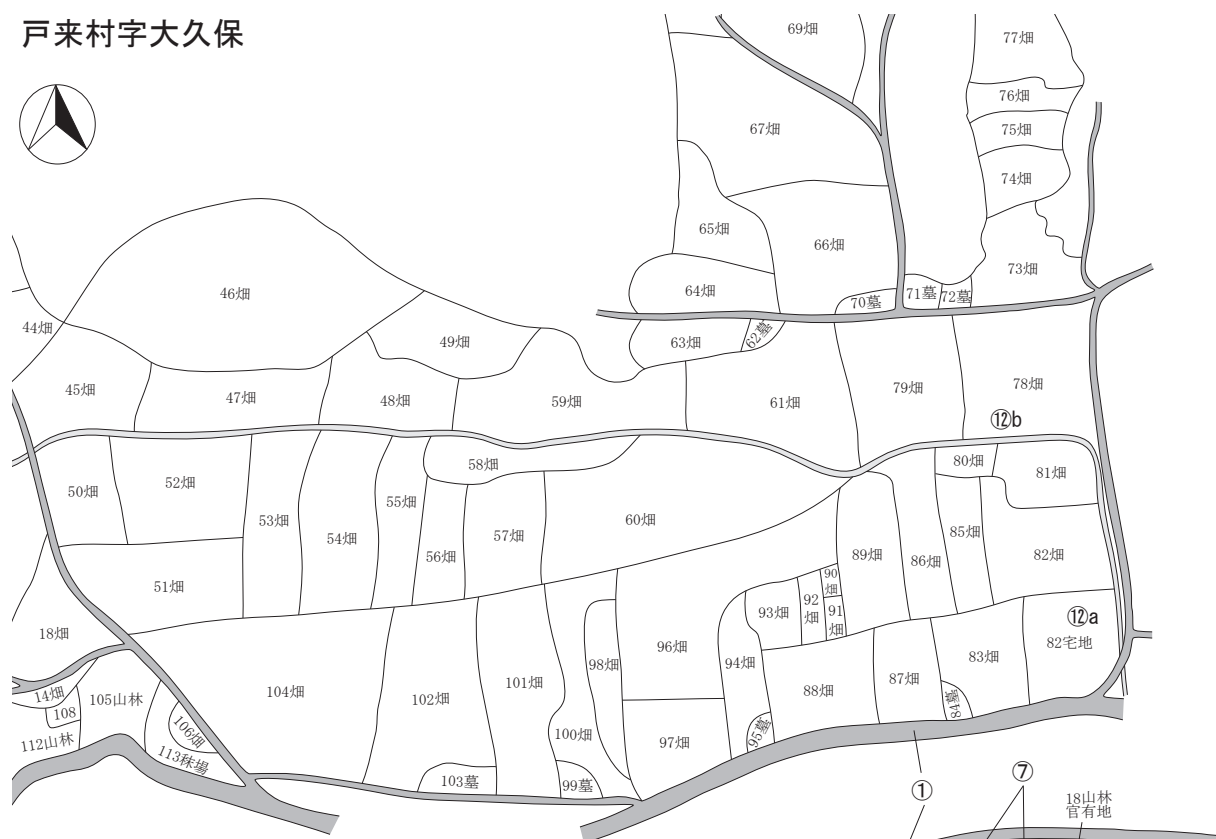
## 6. 戸来館一帯の旧地籍図およびその検討

こうした証言や発掘調査結果をより深く理解するため、今よりも中世に近く、土地の改変が進んでいない明治20年（1887）の地籍図（新郷村役場所蔵）を用いて本遺跡一帯の土地区画・利用を示し、城館復元の参考とする。あわせて発掘調査や聞き取り調査成果との相違についても言及する。

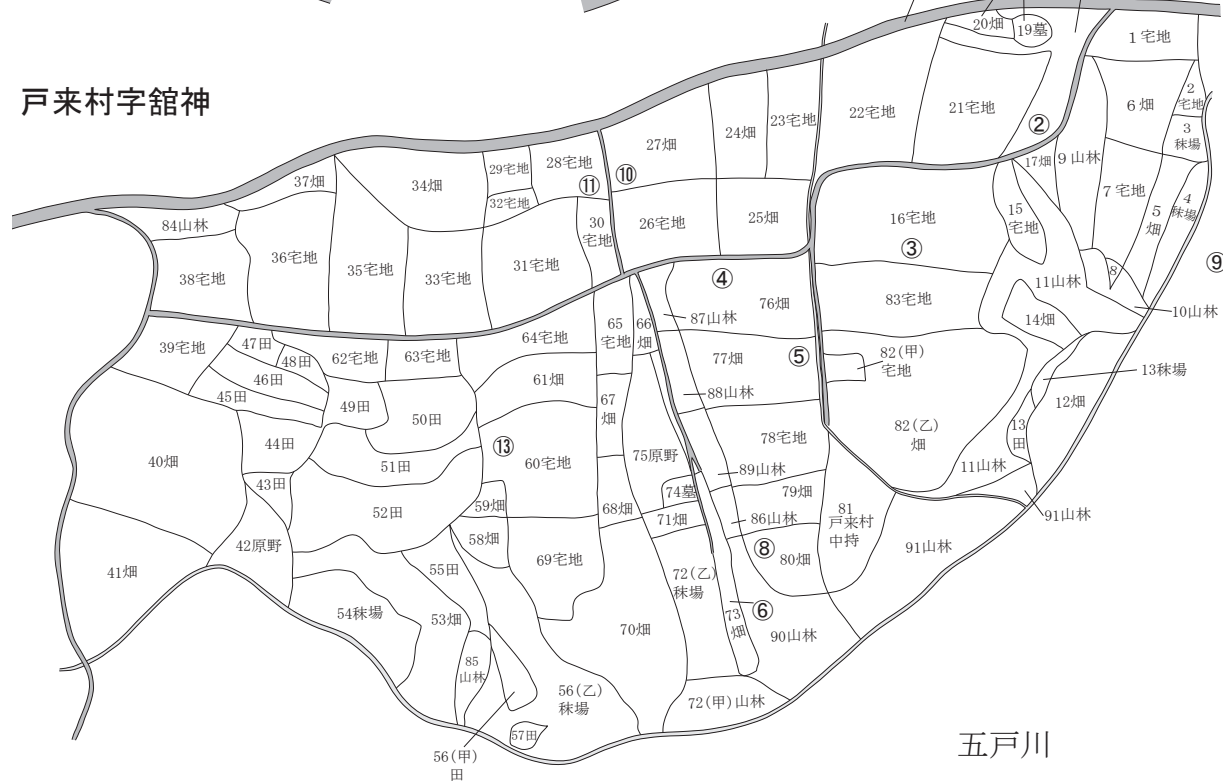
- ① 堀合坂に該当（現存）。東から西へ延び、国道454号線の完成以前、本地域の主要道だった。現在は長泉寺山門前の国道から西へ直進し、戸来小学校へ通じる坂道となっている。
- ② 堀合坂から堀跡1へ通じる小道。聞き取り①と③の証言に符合する在り方である。
- ③ 堀跡2の名残とみられる地境。しかし、絵図中には堀らしき表現は認められない。
- ④ 堀跡2の延長線上に位置する坂道（現存）。西の低地へ下る。これも堀の名残と思われ、③とともに台地および曲輪を南北に分割していたと推定される。
- ⑤ 台地中央を南北に延びる小道（現存）。この中央小道を軸に台地上の各地境は東西へ延びるた

め、各地番は長方形ないし短冊形を呈する。現在、各地番の高低差は少なく概ね平坦だが、微地形を観察すれば、ところにより1 m前後の高低差がある。特に、76～78番地周辺が若干高く、主殿等の中心施設の存在も予測される。なお、中央小道に沿う水路は今、山から引いた上水となっている。

- ⑥ 帯曲輪の名残か（66・73番地）。聞き取り調査⑤に該当。南北に細長く延びる。上部斜面は南北に四分割されている（86～89番地）。現在、帯曲輪の大半は削平され、急崖地の法面、宅地、国道の一部などと化し、極一部が残っているに過ぎない模様である。
- ⑦ 帯曲輪の名残か（19・20番地）。現在も段差が明瞭である。
- ⑧ 台地先端の畑（80番地）。昭和25年（1950）年に戸来村役場が落成、現在は建設されたばかりの館神コミュニティーセンターが存在。西端には小祠が鎮座する。由来は不詳だが、小字である館神の由来、城館の精神的守りとなった館神の名残だろうか。南端部は、本調査F区に該当。
- ⑨ 館跡南東一帯（1～18番地、90・91番地）。宅地・山林・田畑・秣場が混在する。うち山林は、現況との対比により、大部分が急崖や傾斜地と推定（9・10・11・18・90・91番地）。同じく田畑（12・13番地）と秣場（3・4番地）は、国道454号線より下位の五戸川周辺一帯の低地と推定。斜面中腹には、宅地（15番地）や畑（14・17番地）がみえ、平坦地が部分的に存在した模様だが、以上が鉤型気味となる点は大変重要である。斜面上方の宅地境（16・83番地境）からは堀跡2も延びてきており、大手側の要所になろう。なお、この下位に位置する堀合坂入口付近は、宅地（1・7番地）や畑（5・6番地）につき、平坦気味だったとみられる。こちらも城館主体部へ上る手前の曲輪や要所か。発掘調査区外につき不明だが、本付近一帯も城館の要所と捉えておきたい。
- ⑩ 堀跡ないし帯曲輪か。『青森県の中世城館』中では堀跡として描かれている。現状は、東の堀合坂から続く舗装路であり、27番地と28番地の境を北から南へ下る坂道である。堀状に開削・工事されたとも、元は今よりもやや高い位置、すなわち26番地と27番地（曲輪の一部か）の平坦面からやや下った斜面中腹において段を成していたともというのが不明。もし後者ならば、帯曲輪の可能性も指摘される。なお、曲輪頂部の平場から一段下がった位置に在る帯曲輪は、発掘調査で発見された帯曲輪1～5にみられるほか、上記⑥・⑦においても指摘したところである。
- ⑪ 館跡北西の要地か（28・30・31番地周辺）。高低差が著しく、舌状台地西側の基部に該当する。28・29・30・32・34番地は上位段丘、31・33・35番地以降は下位段丘に位置。五戸川方向から続く館跡西側の急傾斜地は、31番地北東角で西へ屈曲、33番地方向へと延び、舌状台地の基部を成す。なお、28番地は土地が南北に低い部分がある。東の堀合坂から続く堀切が眠っているかも知れず、ここから30ないし31番地方向へと下り、台地基部を分断していたようにも思える。
- ⑫ 曲輪の一つか。頂部に竈神社が鎮座（⑫ a）。頂部平坦地はわずかだが、周辺一帯で最も標高が高く、眺望が利く。北東には金ヶ沢が流れ、明らかな高低差を示す（⑫ b）。第二次世界大戦以降、沢の埋め立てが進み、特に西側一帯が畑地と化したというのが、昔は幅が広く、より深かったそうである。
- ⑬ 馬場地区か。但し、証言は不明瞭。館跡南西側の下位段丘面、60～70番地一帯とみられ、現在同様、宅地や畑などの平坦地が広がっていた模様である。



## 戸来村字館神



五戸川

上下の図を東西に延びる長く太い道は同じ道で、その東側は通称堀合坂と呼ばれる①。よって、この道上下の図を合成することは不可能ではないが、更に厳密な調整を要するため今回は別々に提示した。



## 7. 中世戸来館の復元および近世屋敷への存続・展望（抄）

**地選・地取** 五戸木村嫡家戸来氏の居城と伝わる戸来館は、五戸川と支流三川目川の合流点の西側、小平野と小平坦地が広がる場所に位置する平城である。館付近の交通・往来は、概ね五戸川沿いに東西へ移動していたと思われるが、五戸川へ突き出た難所に位置する戸来館は、これを遮るように築かれており、水陸移動の要所に位置しているようにもみえる。城地一帯の地形は、五戸川に向かって南北に長い。標高は北が高く、南が低い。東・南・西側は急傾斜地であり、五戸川が天然の濠となる。北は、金ヶ沢が水濠代わりとなった可能性もあるが、概ね尾根続き気味となる。この点は防衛上の弱点となり得るが、堀切などの普請により補われる。他の城館などとの位置関係は、五戸川の東は同族木村氏の五戸館や又重氏の又重城、同じく西は霊峰三ッ嶽や峻険な十和田・鹿角の山々により守られる。丘陵が広がる南北は、北に奥入瀬川（相坂川）流域の諸城、南に西越館・聖寿寺館・三戸城など、三戸南部一族と譜代の臣が支配したと伝わる拠点が散在する。周辺主要城館までの距離は、又重城3.5km、五戸館12.5km、滝沢館5km、西越館3.5km、聖寿寺館10km、三戸城12km。

戸来館の選地で重視されたのは、第一に天険・要害性と考えられるが、五戸川最上流域の中継地、東西移動の要所確保、周辺城館や寺社勢力との関係性、中世前期「へらいのかう」以来の開発度合も考慮されたことだろう。三戸南部氏が比較的安定的に支配した三戸・五戸における最西端の防衛線上に位置し、その南北を結ぶ繋の城にもなり得る。なお、城地一帯は、いわゆる四神相応の地に類する。

**範囲・縄張り** 五戸川に向かい南へ突出した舌状台地全体が城館の主要範囲・縄張りとなる。これは『青森県の中世城館』で示された堀合坂（旧地籍図①）以南を主曲輪群と捉える見方である。曲輪の平場でみた城地の規模は、南北180～200m、東西130～140m、面積19,000㎡（1.9ha）程度。他にも、堀合坂の北側一帯、龍神社から西へ延びる範囲を曲輪と捉える見方も挙げられる。この場合、すぐ北側の金ヶ沢が外堀代わりとなるが（旧地籍図②）、南を並走する堀合坂との間を南北に区切る何らかの区画が必要となり、その発見が課題となろう。ともかく、龍神社は標高が高く、眺望が利く。物見や射撃に有利である。金ヶ沢も水濠代わりとなる。地名からすれば、南西側の馬場地区（地籍図③）、これと同様の高さに位置する東側の国道454号線沿いも何らかの曲輪と推定する。更に、有事の際、北東鬼門方向に隣接する長泉寺も防御の一角に組み込める仕組みだったようにも思われ、やや西に位置する三嶽神社や多門院にも、同様に神仏の威や加護が期待されたかも知れない。

**構造・普請** 主要施設は、台地最上位から中位に築かれたと想定。主曲輪は南北3つ以上並列、堀切は南北にかけて最低3ヶ所存在する。各曲輪は、平場の高低差が少なく、人工的に高さを揃えた削平地であろう。帯曲輪は、曲輪斜面の上位～中位にかけて籬壇状に重層的に設けられたと推定。今回の調査では、帯曲輪平場同士の高さに加え、堀の形状や高さも揃えられていることが判明した。外観が意識的に整えられた城館東側は、大手の候補地となろう。比較的整然とした城の姿は、曲輪内の屋敷割などにも及んでいた可能性もあり、南北に平行して設けられた各堀は東西軸の基準となり得る。一方、南北軸の基準は、堀に直交しながら曲輪中央付近を南北に結ぶ幅3mほどの小道とみられ、その東西には堀に平行する短冊状の地割が形成される。この小道と地割は、明治時代中期には明確に表れ、今も変わらぬ姿を保っているが、これが中世の名残であれば非常に興味深い。中心建物は、現在の母屋同様、南向きが主となろう。浪岡城北館のように、東西南北が明瞭かつ整然とした屋敷割が復元される可能性もある。曲輪の最南端には小祠も存在するが、これも中世の館神の名残ならば、興味深い（旧地籍図⑧）。城としての防御力は、地形と堀切より、五戸川に面した断崖を擁する南端部（F区）が高く、尾根続き気味の北側ほど低いと見込まれる。主曲輪や主殿の位置は、どちらかとい

えば南寄りの微高地と推定され（旧地籍図⑤）、北側ほど外曲輪、南側ほど内曲輪となろう。

その他の特徴を列挙すると、各曲輪斜面の傾斜角は40～45°程度（参考値）。曲輪1は、南東端が東へ突出気味につき、曲輪2方向に対して横矢が利く。曲輪縁辺に竪穴遺構を設ける点は、他の諸城と同様である。曲輪2は、東縁の南北長23m。この部分の間積りは、1人1間とすれば十数名配置可能となる。帯曲輪は、概ね幅3m以上と推定、基部の溝は排水ないし下水溝か。帯曲輪2は他よりも一段高く、重層射撃に有利である。堀は、底部に階段状の平坦面と空間を形成。その役割は不明だが、高さ2～3mほどの段差が設けられ、三方から見下ろされることを重視すれば、障子堀や行留郭のように攻撃側を足止めし包囲殲滅させる目的のほか、守備側が自軍の兵を待機させる武者溜や武者隠しとしての利用も想起させる。場内へ進入する動線は、城戸・虎口等の存在が不明につき課題だが、東から入る場合、重層射撃や横矢効果を考えると曲輪2周辺、更に奥の曲輪3が有力視される。

**年代・廃絶** 存続期間は、目下不明。築城開始は、戸来家入部と伝わる文明年間に遡る可能性を秘めるが、無文銭の存在を重視すると16世紀後半代に機能していた可能性が高まる。破却時、堀は鋤や鍬などの金属器を用いて帯曲輪平場の高さまで一気に埋め戻されたとみられるが、曲輪の平場縁辺付近は堀の窪みが残された公算が大である。そこには、防御の要となる堀や帯曲輪の機能を大幅に低下させる意図とともに、破壊を徹底しない意図も垣間見える。八戸根城同様、防衛上重要な施設の破壊を第一としたか。埋土の出所は、その質量より、周辺の曲輪や堀の壁面が掘り崩されたといえるが、この時、周辺施設が攪乱され、遺構・遺物の遺存状況に何らかの影響を与えた可能性もある。この点は、他の城館の廃絶・調査・復元を考える上でも留意すべき事項となろう。

最後に、戸来館の廃絶時期に敢えて触れると、やはり天正18年（1590）の奥州仕置ないし翌19年の再仕置に係る破却が一つ有力視される。豊臣秀吉が南部信直へ発給した朱印状（天正18年7月）には、「一、家中之者共相拘諸城 悉令破却 則妻子三戸江引寄 可召置事」とあり、秀吉に忠実だった信直譜代の戸来氏が自城の破却に従った可能性が充分にある。但し、翌19年に起きた九戸政実の又重城攻撃が事実ならば、戸来館にも何らかの備えが施されていたかも知れない。慶長3年（1598）に至ってもなお当館が存在していた可能性もあるが（『南部氏慶長支配帳』（江戸期））、江戸時代を通じて戸来氏がこの地を治め続けている事実を加味すると、天正末年以降も戸来氏の統治拠点（屋敷など）が中世とは異なる姿で本遺跡内に構えられていたとしても不思議ではない。これは、八戸根城や七戸城の破却に類する見方である。戸来館の堀の埋め立てが徹底されていない理由をこの辺に一つ見出すとすれば、秀吉による破却命令の遵守と、その後も続く戸来氏統治における必要性との均衡を図った結果の表れといえまいか。あわせて、中世戸来館の軍事性喪失から近世戸来屋敷を中心とする地方支配への転換、ひいては中世の終焉と近世への移行の一端を示しているという指摘にも繋がろう。

なお、本遺跡の調査・報告は、まだ続く予定である。不備等は今後改定に努めたい。（佐藤）

※1 城地の地形利用区分表中において、河岸に臨みたる台地若しくは山稜の尾根の末端を利用せるもの（山地内の小河谷を含む）に分類（沼館1981 p. 3～6）。

※2 隣接する沢口館と長峰館は同一の遺跡か。ともに土師器・須恵器が散布するため、平安時代の区画集落から中世城館への再利用も想定される。倉沢出口館は、平面形状からすると平安時代の区画施設または中世でも城館以外の施設に見える。以上の性格について、平安時代の区画集落、戸来館以前の城館、戸来館西方の守りに関わる一城館の可能性を挙げておく。

引用・参考文献

- 青森県 2003 『青森県史』 資料編 考古 4 化研究室紀要』 58  
中世・近世 倉石村 1983 『倉石村史』 上巻
- 青森県 2004 『青森県史』 資料編 中世 1 倉石村 1989 『倉石村史』 下巻  
南部氏関係資料 栗村知弘 1989 「天正期の根城 一破却（城わ  
り）の実態について」『研究紀要』 5  
八戸市博物館
- 青森県 2012 『青森県史』 資料編 中世 3  
北奥関係資料 五戸町教育委員会 1996 『五戸館遺跡』
- 青森県 2016 『青森県史』 資料編 中世 4 五戸町教育委員会 2005 『中市館跡Ⅴ・馬場遺  
金石文・編さん物・海外資料・補遺 跡Ⅱ・八盃久保（2）遺跡・門前平遺  
跡』
- 青森県 2016 『青森県史』 資料編 近世 4  
南部 1 盛岡藩領 三戸町 1997 『三戸町史』 上巻  
七戸町 1985 『七戸町史』 第2巻
- 青森県 2018 『青森県史』 通史編 原始 古 千田嘉博ほか 1993 『城館調査ハンドブック』  
代 中世 新郷村 1989 『新郷村史』
- 青森県教育委員会 1983 『青森県の中世城館』 鈴木克彦 1984 「青森県新郷村女ヶ崎から出土  
した古銭」『考古風土記』 9
- 青森県教育委員会 1985 『奥州街道（1）』 青 田中喜多美 1979 私家版『戸来家七百七十年  
森県「歴史の道」調査報告書 史』補遺
- 青森県教育委員会 1991 『中野平遺跡』 青森県 虎尾俊哉編 1982 『青森県の地名』 日本歴史地  
埋蔵文化財調査報告書第134集 名大系2 平凡社
- 青森県教育委員会 2003 『獅子神遺跡』 青森県 南部叢書刊行會 1928 『南部叢書』 第二冊  
埋蔵文化財調査報告書第339集 南部叢書刊行會 1929 『南部叢書』 第五冊
- 青森県教育委員会 2019 『青森県遺跡詳細分布 沼館愛三 1981 『南部諸城の研究』  
調査報告書31』 青森県埋蔵文化財調査 古市豊司 1980 「「書評」新郷村咽畑遺跡の調  
報告書第605集 査」『考古風土記』 5
- 青森県立図書館 1973 『木村文書』 解題書目第 平凡社刊 1959 「先縄文・縄文時代」『世界考  
4集 古学大系』 1 日本 I
- 井上宗和 1978 『日本の城の基礎知識』 三浦栄一 1982～2019 『流れる五戸川』
- 小山彦逸 2013 「北奥羽地方における一国一城 宮一雄 1982 『浅水城主南氏の研究』  
令破却後の城跡利用の一断面」『研究紀  
要』 18 青森県埋蔵文化財調査センター
- 亀ヶ岡文化研究会 1979 『新郷村咽畑遺跡の調 査』 亀ヶ岡文化研究会調査研究報告 1
- 菊池徹夫ほか 1989 『よみがえる中世4』 北の 中世 津軽・北海道
- 岸俊武編 1876 『新撰陸奥国誌』 5 みちのく 双書第19集 青森県文化財保護協会
- 熊谷隆次 2015 「文禄・慶長初期における南部 領五戸新田村代官所について」『東北文





曲輪2 堀跡1 (北から)



曲輪3 堀跡2 (北東から)

写真1 調査前状況 (1)





曲輪2 曲輪3 (南東から)



曲輪1 曲輪2 堀跡1 (東から)

写真2 曲輪 (1)